

恩師 友田 宜 孝 先 生

中 村 亦 夫

名誉教授友田宜孝先生は去る2月27日午後1時、ご家族、ご親戚、門弟らに見守られながら、早春のその日に春眠を貪られるように安らかに永眠されました。「生物は皆自分で病気を直す力を持っている」との先生の信念が禍いしてか、去夏胃癌と判明したときは手遅れで、その後自宅で静養しておられた次第です。私どもは半年以上この日の来ることを覚悟してはおりましたが、その悲しさ、淋しさは耐え難いものがあります。

先生は明治28年1月1日福井で誕生され、東京府立四中、一高を経て東大工学部応用化学科に入学され、大正9年優秀な成績で同科を卒業後、直ちに同科の講師となられ、続いて助教授となられました。先生の専門は糖類醱酵であって、当時の研究では、「醱酵法によるグリセリンの製造」、「日本産海藻の化学的研究」、「硫酸を唯一の窒素源とせる酵母蛋白質の窒素分布」、「纖維素醱酵に関する研究」などがありますが、そのうち、グリセリンに関する研究は特に有名で、先生の博士論文でもあり、その内容中のアルデヒドの定量法は、いまなお友田氏変法としてその方面で重宝がられています。先生の研究は非常に周到緻密であって、先生みずから実験を楽しみ楽しみ行われたもののように感ぜられます。これら専門のほか、他学科学生のための講義として化学工学を教えておられ、その内容を纏めたものが有名な「最新化学機械学」であって、世人で化学工学が先生の専門と思っている人も多いようです。もっとも先生ご自身も工学士として当然のことですが、化学工学に興味を持たれ、大分力を入れておられたらしく、昭和10年11月の留学を特に優先的に命ぜられたのは化学工学の関係であったと聞いております。

さてこの2ヶ年間の留学は主としてパリーのソルボンヌ大学でマダム・キュービンの下でタガトースの構造などについての研究でありました。語学に長ぜられた先生が女流画家であられる令夫人と共に過ぎたパリでの生活は先生の最良の時代であったことでしょう。

昭和17年第二工学部が設立される際には、先生は応用化学科主任教授として尽力されました。このとき

私はすぐ先生の配下に入れていただいたのですが、兵役のためお手伝いできず、先生は主任としての仕事のほか講座の仕事も一人でされ大変であったこととっております。戦後の窮乏時代にもよく学生を愛撫指導され、第二工学部が生産技術研究所に移管後は第4部の長老教授としての仕事および私以下の研究指導に努力されました。またその間、昭和26年から27年の2年間、本誌の編集委員長として、あるいは外郭団体財団法人生産技術研究奨励会の理事としても、研究所の発展にご尽力されました。昭和30年3月停年退職後は和洋女子大学専任教授として、また日本大学工学部講師など教育方面に活躍しておられました。

先生の講義は非常に明解で要領を得ており、比喩やユーモアをよく取り入れられ聴き惚れるような名講義でした。「話術の上手な人は著述もうまい」と言いますが、先生の著書は羨ましいような名文で読者に親しみを与えるとい



故友田東大名譽教授

いったものでした。先生の最後の仕事

は坂口・浅井・山口の三権威の協力を得て編集された、共立出版の「微生物工学講座」で、第4巻には先生みずからも執筆しておられます。

先生のご性格は温厚で他人と争うということを最も嫌われ、下のものを叱るといふことも極めてまれで、門弟はなにかといて先生の下に集まり、家族のように和やかに過すこともしばしばでした。先生はまた趣味も非常に豊かで、不粋な私などその方面で教えていただくことも多かつたし、記念会で送られたピアノは晩年の先生の最大の慰めでありました。

最後に先生の指導方法ですが、一顧放任のようですが、研究には経験を第一とされ、細かな指示をされることなく門弟の思うように研究を進めさせる方針でした。この方法の成果は門弟の能力にも関係することですが、学士に対するものとしては実に立派であると考えます。

先生のご冥福を祈りますと共に、最悪の天候でいとなまれました告別式に多数のご来訪を得ましたことに深く感謝いたしております。(1957.4.30)